

としてハノイから台南に移駐される時、ハノイにいた父が記された親展書を、土屋宅まで届けてくださったのです。父の親書を読み、初めて父の無事であることがわかり、家族一同安心することが出来ました。しかし、生活の方は、父の帰国が遅れば安心できませんでした。その頃、道路に衣類や家具等を並べて生活の資を工面する姿が見られました。父の帰台の日がわからないため、五人の生活費もいつまでも安心していられなくなりました。

その時、父が出発前に設立発起人の一人として開業した高砂鉛筆台湾工場で製作した鉛筆の在庫品を全島に向けて販売することになったので、その卸商を引き受け、新聞の全島誌に広告を大々的に出して、販売し、これで父の帰宅、日本への引揚げがおくられても、生活の心配だけはなくなりました。

高砂鉛筆の販売に励み、生活の安定が確実になりほつとした時、留守家族は第一船で帰国させるというので、その日のうちに手続きを完了して数日後、家の中は、ちょっと外出する時の状態のまま、私たちは基隆

港から帰国の途につきました。持ち帰り品は、身辺の衣類三点ずつと一人千円でした。

## 我が家の戦中戦後奮闘記

沖繩県 大浜 基子

太平洋戦争が勃発した年、私は当時の女学校四年生だった。私は台湾の台北州基隆市に生まれ育ち、母や妹二人の家族に囲まれ、しあわせに暮っていた。

昭和十七年三月、女学校を卒業した後、四月には、台湾総督府立台北第一師範学校本科女子部に進学したが、翌年の半ば頃から防空訓練、射撃訓練等が授業に代って多くなると共に、学徒勤労動員として、市街各地の警備にあたることもあった。その頃、大雨の中を台湾総督府前の広場で学徒隊の閲兵行進に参加したことは忘れられない。

戦争も中盤に入った昭和十九年三月、私は無事に師範学校を卒業することができ、母校の基隆市々立双葉

国民学校に訓導として赴任した。

しかし、赴任して間もなく学童疎開が始まった。私は戦場に残り、疎開できない児童等の授業にあたった。市内のめばしい学校の建物には、大部隊が駐屯していたから、授業は各地域ごと、児童の家を借りて行われた。

私の家では、母と妹二人が台中州の田中という村に疎開していた。父と私は、戦時下とはいえ、毎日通勤していたが、空襲が始まり、戦況の不安が徐々に胸中をかすめるようになった。安全だと思われていた母達の疎開先でも敵の機影を見るようになったとのこと、父は同じ危険ならと、母や妹を連れ戻した。

昭和二十年に入ると、空襲は昼夜の別なく日ごとに激しさを増してきた。警戒警報が出ると、私は昼夜を問わず、防空頭巾をかぶり、救急袋を肩に掛け、学校へと飛んで行った。

校長は、灯火管制下の暗い職員室で点呼をとり、全員の出欠を確かめる。校長はじめ、職員のもめたいせつな任務は、御真影をお守りすることだった。御真影

を安置する防空壕は避難用の防空壕とは別に、運動場に続く山の斜面に掘られていた。初めのうちは、警報が出る度にお移ししていたが、空襲が激しくなつてからは、ずっと壕内に安置された。そして職員が交替で守護に当った。

学校は、講堂が爆撃で全壊したものの、他の校舎はほとんど無事だった。

私の家では、父が隣家の人と掘った壕が、家のすぐ傍の山の側面にあり、家族の避難場所となっていた。母や妹が、父達の掘った土や石ころを運ぶ作業を何日も続けてできた壕だったが、この壕のお蔭で戦争を切り抜けることができたのである。また住宅のほうも、塹が破壊されただけで無事だった。それは誠に有難いことだった。家を失った同郷の二家族が身を寄せ、狭いながら三世帯十二人が引揚げるまで、風雨をしのぐのに充分だったのである。

昭和二十年八月十五日、ようやく終戦を迎えた。

しかし、不安や苦勞がこれで終ったわけではなく、新しい困難の始まりだった。父は地元台湾人の暴動を

怖れた。中国兵の上陸に伴なう混乱も同様で、治安面の不安が何より大きかった。つぎに金銭面の心配だった、父と私の月収がストップされるのは必至だ。食糧難も当然考えられる。父の不安は際限なく拡がった。それに、この危険な植民地からいつ脱出できるのか、父のみならず、台湾在住の日本人のすべてが最も危惧したことではなかったか。

終戦詔勅の放送があつてからの数日は、人びとは家にこもり、息をひそめて世の動きをうかがった。幸い、心配された暴動らしいものは、私達の身辺ではなかった。ほっとしながらも、恐る恐る行動開始となる。

父や私は、戦場に出て中国側の接収を受ける準備にかかった。その一方で私は、接収後の身分確保のためにと、北京語の講習を受けさせられた。

間もなく、父と私は戦場を解任となった。父は運河端に掘立小屋を建て、母と食堂を始め、私とすぐ下の妹は、朝薄暗い中に起きて餅やパンを仕入れ、部隊内や民家に行商して歩いた。しかし、お金を稼いでも物はなく、やむを得ず、母の高価な着物が食糧との物々

交換で、次々と消えていった。また母は、四、五日おきに農村まで汽車で買出しに出かけた。小柄で細い母が、芋や野菜など一杯詰め込んだリュックをかつぎ、足を引きすりながら帰ってきた姿が今でも目に浮かぶ。私達一家が病気にもかかわらず、戦争の試練に耐え抜くことができたのも、母の大きな苦勞に支えられたお蔭だと思う。

終戦翌年四月、父は私とすぐ下の妹を、閘船で石垣に帰した。父母と一番下の妹は、国の引揚船で横須賀まわりでその年中頃石垣に着いたが、父は引揚げる前に最後の仕事として、鉄道部上層に働きかけ、沖繩県人輸送のための専用列車を仕立てた。

石垣に引揚げ後は、家族総出で一畝一畝、荒地を開墾しての農業、山への薪取り等初めての自給自足の生活が何か年か続いた。

戦争のため、さまざまな形で犠牲になった膨大な人びとにくらべて、私達の苦勞は取るに足らないものかも知れないが、自分の意志に反して苦難に翻弄されたと思うと、やり切れない気持になるが、家族が揃って

日本に無事に帰ることができたのは、不幸中の幸いであつた。

## 故郷喪失、そして

東京都 大友 康 弘

昭和二十一年三月三十一日、台北から基隆の港に向かう引揚げ列車に石が飛んで来た。「早く帰れ、……」の罵声、見れば台湾人の子供が「アカンペー」をしている。

敗戦国民の悲しさ、いったい我々、日本人は何をしたというのだ。長い統治の反動が少年の心に焼きついでるの暴言なのだ。

波止場に向かう路地上に銀のカップが捨てられているのを見た。また、紙幣が破られ、海に浮いていた。厳しい検査云々のデマにおびえながら、ここまで持つて来て遂に捨てなければならなかった人びとの胸中は如何に。

乗船したのは夕方に近かつた。

ポーウ、ポーウ。哀愁切々たる出港の汽笛、刻々船は岸を離れる。夕闇せまる彼方に薄れゆく山々、デッキから身を乗り出して見つめる子供たち、一瞬たりとも目をそらすまいと。生まれて十四年、少年を育て育てきたふるさととは今、そのいとし子と意志なき離別を強いられようとしている。

よろこびの地を・たからの土地を・追われ追われて・行先もない・国の中にも・国の外にも・

と、少年たちの間から期せずして合唱が起こつた。「さうらば台湾よ、また来るまでは」

戦いの生んだ別れの歌だった。そして、このメロディーは人々の心をゆさぶりながら、故郷の灯が闇の中に没するまで続いた。

浦賀の駅を出た引揚げ専用列車に、まもなく、気負い立った他の乗客たちが窓を乗り越えてなだれ込んで来た。おびえて泣く子供の声に、ある引揚げ者が言った。「自分たちは船旅で疲れているんだ」すると、魚臭のにじむカゴを背負った男が言った。「俺たちは毎